

【vol.65】 空気の読み方について ～その2～ 9thのテンション

どうも、大沼です。

前回から、「空気の読み方について」というテーマで、

『シンプルなプレイと高度なプレイの、両者の方法論』

を学んでいますね。

前はシンプルなものをやったので、今回から高度よりの奏法ロジックに入っていきます。

プレイ(フレーズ)を高度にしていくのには、いくつか方法があるのですが、今回はその中のひとつ、『テンション』についてやっていきましょう。

テンションには9th、11th、13thと種類があるのは知っているかと思いますが、今回はその内の『9th』についてのお話です。

最初は「空気の読み方講座」は、全部あわせて3通くらいで終わるかと思っていましたが、いざ作ってみたら今回の9thだけでテキスト1本分になったので、5通を超えるかもしれません。

まあ、「テキストが多くなるのは良いことだ」と自分に言い聞かせながら、残りの分も作っていきたいと思います。

今回、譜例も多めに載せているので、それぞれじっくりと弾いてもらって、9thのテンションの響きを感じてもらえれば、と。

では、始めていきましょう。

今やっている事は「空気の読み方について」というテーマですが、これは要するに、『今、その曲に相応しいプレイをしよう』という話ですね。

主に、その楽曲のハーモニーの状態(複雑なのかシンプルなのか)を基準に、場面に応じて、自分が弾くべきモノのバランスを考えていきます。

前回は、

『バックで鳴っているコードのコードトーンをメインに選んでフレーズを作る』

という方法論を使って、シンプル寄りのプレイの仕方を学びました。

単純な話、『コードトーン(主にroot、3rd、5th、7th)を弾く』と言う事は、バックのコードの内容をバラで弾いているようなものなので、ハーモニー的に非常に安定しますよね。

そして「安定する」と言う事は、良く言えば「非常に聴き心地の良い」ものですが、悪く言えば「普通すぎてつまらない(つまらなくなりがち)」なわけです。

それがどちらになるのかは、その時のプレイング次第ですが、そもそも論として、「どうやったらシンプルになるのか？」と「どうやったら複雑(高度)になるのか？」の両者の基本的な方法論を、今、学んでいる、と言うわけですね。

なので今回は前回の「シンプル寄りの奏法」とは対極にある、「複雑(高度)よりの奏法」についてやっていきましょう。

では、まず最初に、『どうやったら複雑で高度なプレイになるのか？』について、要点をあげてみたいと思います。

細かいことを言えばもっとあると思いますが、今回は大きく分けて3つのポイントからフレーズの考え方を見ていきます。

まず1つ目のポイントは、**テンションノートを使う(増やす)**と言うことです。

前回はコードトーン(root、3rd、5th、7th)を選んで弾くと(ハーモニー的に)安定する、という方法論でフレーズを弾きましたね。

それとは逆に、**テンション(9th系、11th系、13th系)を選んで弾くと、「テンション=緊張」の意味の通り、安定感が薄れ、ハーモニー的に高度になっていきます。**

次に、2つ目は、**フレーズの譜割を意識すること**です。

これは、意識すること、と書きましたが、具体的な方法としては、シンコペーションや休符を使う場所を工夫することで、難解さをコントロールする、と言った感じですね。

例えば、わかりやすい例としては「1、2、3、4」とビートがあるとして、各ビートのオモテの拍から「ドン」とフレーズを始めるよりも、8分ウラ、16分ウラなどからフレーズを始めると、フレーズが複雑に聴こえてきます。

これは文章ではちょっとイメージしにくいかも知れないので、譜例で詳しく見ていきましょう。

最後の3つ目は、**インターバルを広くとったフレーズを弾く**と言うことです。

単純に「ドレミファソラシド～」のような、音と音が近い音列を弾くよりも、「ドミソシド～」のように、インターバルを広めに取った方が、高度に聴こえる傾向にあります。

これら3つのポイントをメインに、フレーズを高度寄りにしていく具体例を見ていきましょう。

さて、最初は1の、**テンション・ノートを使う(増やす)**という事ですが、テンションにはいくつか種類がありますよね。

先ほども書きましたが、大雑把に分類すると、

- ・ **9th系**(\flat 9th、 \natural 9th、 \sharp 9th)
- ・ **11th系**(11th、 \sharp 11th)
- ・ **13th系**(\flat 13th、13th)

の3種類です。

これらは、いつでもどこでも自由に使えるわけではなく、一応、音楽理論的な観点からルールがあったりします。

最終的には「ルールをキチンと理解した上で無視する」とか、「感覚で音を選ぶ」という方法もあるにはありますが、とりあえず、基本のルールくらいは知っておいた方が良いでしょう。

とは言え、テンションの使用法みたいなものを全て解説すると相当な量になりますので、今回はさわりの部分だけを学んでいきましょう。

と、言うことでまずは9thについてです。

3種類のテンションには、それぞれ「#」と「b」が付くものがありますが、今回はどちらも付かない、純粋な「9th」「11th」「13th」のみ扱います。

9thは個人的には、簡単にクールで高度な響きを加えられるのでよく使うのですが、メジャーコードに対して使う(入れる)のと、マイナーコードに対して使う(入れる)ので、若干、感じ方が変わります。

テンションの中ではかなり気軽に使える部類の9thなのですが、それでも、『使える(入れられる)コード』という分類がありますので、皆さんおなじみの、ダイアトニックコード表で確認しておきましょう。

以下の様に7つのコードがあった場合、9th を使えるのは赤字で示したコードになります。

※key=Cの場合

I M7 — CM7

II m7 — Dm7

III m7 — Em7

IV M7 — FM7

V 7 — G7

VI m7 — Am7

VII m7(b5) — Bm7(b5)

メジャーキーの場合、1、2、4、5、6度のコード上で9thが使える(入れられる)という事ですね。

これはなぜこうなるのかと言うと、それぞれのコードの大本のチャーチモードのスケールを見てみればわかります。

1度=イオニアン、2度=ドリアン、4度=リディアン、5度=ミクソリディアン、6度=エオリアンとなりますが、それぞれのスケールには9thの(=音名としてはM2ndと同じ)音が含まれていますね？

(※この辺り、「よくわからないんだけど？」と言う場合は、vol.27~28の「インターバルの呼び方」の回と、vol.21の「チャーチモードの7種類のスケールポジション」の回を参考に復習してください)

逆に3度(III m7)のフリジアンと7度(VII m7(b5))のロクリアンは、2ndがb9th(=m2nd)なので、 $\sharp 9$ th(=M2nd)は使えません。

(※ III_m7 には、アレンジで、わざとキーから外れる[♯]9th を入れる事もたまにあります)

「じゃあ3度と7度のコードには、 \flat 9th を入れたら良いんじゃないの？」と思うかも知れませんが、その場合、 \flat 9th はトニックから見てアヴォイドになるのでダメなんです。

と、ここまでなんやかんやとお話してきましたが、とりあえずは単純に、『9th を使えるコードはどれなのか？』がわかっているだけでOK です。

ちなみに、9th をコードに加える場合、7th 系のコード(4 和音)にさらに 9th を加える、『CM9』や『Cm9』の様なタイプと、

The image shows two examples of 9th chords. On the left is CM9, with a guitar chord diagram showing the 1st fret on the 2nd, 3rd, and 4th strings, and the 3rd fret on the 5th string. Below it is a musical staff in 4/4 time with two notes, G4 and G5, marked with a first finger (1) and a second finger (2). The dynamic is *mf*. Below the staff is a guitar TAB with fret numbers 3, 4, 2, 3. On the right is Cm9, with a guitar chord diagram showing the 1st fret on the 2nd, 3rd, and 4th strings, and the 3rd fret on the 5th string. Below it is a musical staff in 4/4 time with two notes, G4 and G5, marked with a first finger (1) and a second finger (2). Below the staff is a guitar TAB with fret numbers 3, 3, 1, 3.

トライアド(3 和音)に 9th のみを加える、『C add9』や『Cm add9』の様なタイプがありますね。

The image shows two examples of triad-based 9th chords. On the left is Cadd9, with a guitar chord diagram showing the 2nd fret on the 2nd and 3rd strings, and the 3rd fret on the 4th string. Below it is a musical staff in 4/4 time with three notes, G4, B4, and D5, marked with a first finger (1) and a second finger (2). Below the staff is a guitar TAB with fret numbers 0, 3, 0, 2, 3. On the right is Cmadd9, with a guitar chord diagram showing the 2nd fret on the 2nd and 3rd strings, and the 3rd fret on the 4th string. Below it is a musical staff in 4/4 time with three notes, G4, B4, and D5, marked with a first finger (1) and a second finger (2). Below the staff is a guitar TAB with fret numbers 10, 8, 8, 10, 8.

これらの 4 和音に 9th を加えるコードと、トライアドに 9th を加えるコードは、響き自体には共通する部分もありますが、コードとしては明確に違うものです。

よって、アレンジなどで使うときは、キチンとどちらかを選択することになります。

後、先ほどの『CM9』についてですが、コードの音構成を、正確に表す(低い音から順に積み重ねる)ならば、厳密にはこう(左)ではなくて、右のようになります。

ですが、普通のチューニングのギターでは、右の様な和音を左手のみで押さえるのはほぼ不可能なので、左の様な、構成音のどれかを省略したフォームになるのですね。

同じように Cm9 の場合も、コードネームが意味していること自体は、Cm7 の 4 和音 + 9th ですが、実際に押さえるフォームでは、どこかの音を省略することが多いです。

さらにもう 1 つ、9th を加えるフォームを考えた時、ギターの構造上、特有のコードフォームとして、以下の様なものがありますが、

このフォームの場合、M3rd も m3rd も含まないので、『C add9』、『Cm add9』のどちらの場所でも使うことができます。

ですが、これは厳密には(構成音だけを見たら)、3rd を 2nd に sus した(=吊り上げた。sus4 との sus と同じ意味)コードとなるようなので、『C add9』、『Cm add9』などと、本質的

な意味自体は違う(扱いをする可能性もある)、と言う事を覚えておきましょう。
(※でも使っても OK)

さて、基礎解説が長くなりましたが、普通のトライアド、add9 系、7th を含んだ 9th 系と、それぞれのコードをゆっくりと鳴らして、響きの違いを聴き比べてみてください。

そうして、作曲やアレンジの時には、明確にどのコードが自分のイメージに合っているのかを判断できるようにしましょう。

では、今回の主旨である、「高度よりなプレイ」の1つの指標として、9th のテンションを加えた(強調した)実戦フレーズをいくつか弾いてみましょう。

まず、コード進行ですが、以下の様なものを使います。

♩ = 60

S-Gt

CM9 FM9 Em7 Am7

mf

4/4

1 2 3 4

3 8 8 8 8 8 8 8

4 8 7 8 5 5 5 5

2 7 5 5 5 5 5 5

3 8 7 5 5 5 5 5

Bm7(b5) Am9 Dm9 G7

5 6 7 8

8 8 8 8

7 5 5 5 3 4 3 3

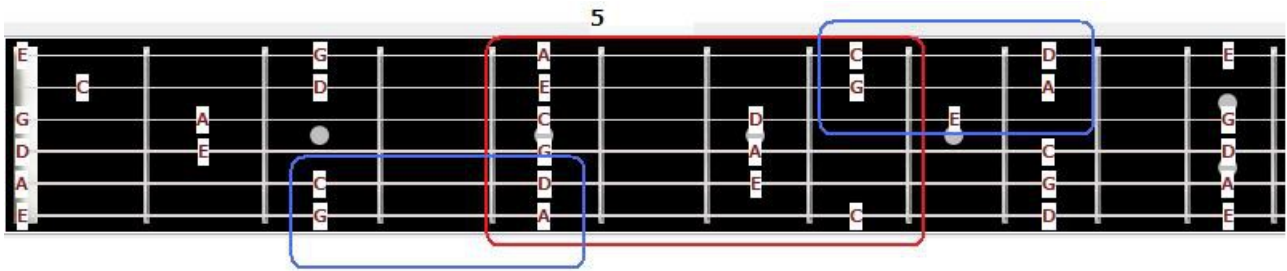
7 5 5 5 3 4 3 3

無理やり key=C のダイアトニックコードを全部使い、9th が入れられるコードには出来るだけ 9th を入れて、かつ使用頻度の高いコードフォームに統一したので、このまま弾くと若干の不自然さを感じなくも無いのですが、トレーニングとしてのわかりやすさを優先しました。

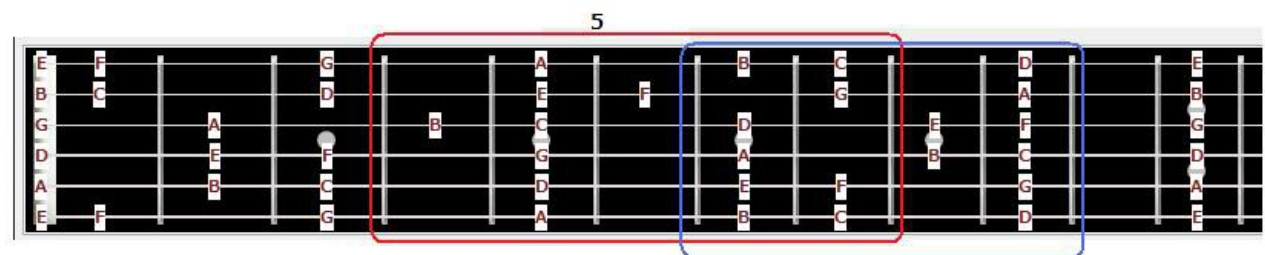
ちなみに最後の G7 にも 9th を入れられますが、響きの関係で普通の G7 にしてあります。
(※ III m7 である Em7 と、VII m7(b5) である Bm7(b5) には 9th は入れられません)

スケールは C メジャーペンタと C メジャースケールのこの辺りのポジションをメインに使っていきます。

※Cメジャーペンタ



※Cメジャースケール



さて、このコード進行の中で、9th を入れられるコードと、今回使うスケールポジション付近での、それぞれの9th の位置は以下ようになります。

♩ = 60

S-Gt

CM9	FM9	Em7	Am7
1	2	3	
(0)	(0)		(0)
(0)	(0)		(0)
<i>mf</i>			
10	8		7
(7)	(5)		(4)
(5)	(3)		(7)

Bm7(♯5)	Am9	Dm9	G7
5	6	7	8
	(0)	(0)	(0)
	(0)	(0)	(0)
	7	(12)	5
	(4)	5	(7)
	(7)	(7)	(5)
			4x
			4x

赤枠で囲った部分が9th を入れられるコードで、タブ譜の表記がそれぞれのコードに対する9th の位置です。(※カッコで囲った音はオクターブ違いのフレット)

具体的な音名としては、CM7 に対してはD音、FM7 に対してはG音、Am7 に対してはB音、Dm7 に対してはE音、G7 に対してはA音が9th に当たります。

ここまでを踏まえた上で、まずは、テンションの事など特に考えずに「主にペンタをベースに、スケール的な見方でソロを弾いた場合」と言った感じの譜例を弾いてみましょう。

テンポは自由に変えてもらって構いませんが、譜面では60としてあります。音の響きを感じやすいように、最初はゆっくり目で弾いた方が良いでしょう。

一応譜割もありますが、若干タメたり、崩したりした方が、それっぽくなります。

あと、重要なこととして、出来るだけコードバックを鳴らしながら弾いた方が、インターバルの感覚(響き)が感じられるのでお勧めです。

バックを録音する(作る)場合は、先ほどの譜面の通りの9thを入れたフォームではなく、7thまでの4和音でコードを弾いた方が自然な場合もあると思います。

(※色々試してみてください。ただし譜面で指定したコードフォームは良く使うので覚えておきましょう。)

譜例 1、主にペンタでスケール的な見方で弾いたソロ

♩ = 60

S-Gt

CM9 FM9

mf

1 2 3

TAB

3 5 3 5 7 5 7 5 9 7 5 10 8 9

Em7 Am7

4 5

TAB

7 5 7 7 9 7 5 5 7 5 7 5 7 5 7 5 7 5 7 5

※次ページに続きます

主にペンタで、あまり何も考えずに、コードに対して落ち着いた音を選んで弾くと、大体こんな感じです。

次に、今回のテーマである 9th のテンションを入れたり、コードトーン・アルペジオ的なフレーズを交えたりと、もう少し音楽的な工夫を入れたフレーズを弾いてみましょう。

譜例 2

※次ページに続きます

Bm7(b5) Am9
 23 24
 TAB
 7 5 7 5 6 5 7 5 6 8 5 7 7 5/4 5 8 5 5 7 5 5 5

Dm9 G7
 25 26
 TAB
 7 8 10 9 7 9 9 10 8 8 10 7 7 7 8 7 5 3 3 5 3 5 3

それぞれのコードに対して、どんなインターバルの音を弾いているのかを分析してみてください。

最後にもう1つ、上の二つは、どちらかと言えば、スケールポジションをタテに見ている感じがすると思いますが、今度は逆に、ヨコによく動く様な感覚のフレーズを弾いてみましょう。

譜例 3

CM9 FM9
 27 28 29
 TAB
 10 7 8 7 12 (12) 12 13 12 10 8 10 12 15 13 12 13 12 10 8 (8)

Em7 Am7
 30 31
 TAB
 7 5 8 10 8 12 7 5 8

※次ページに続きます

The image shows a guitar score with two systems. The first system is for Bm7(b5) and Am7, with a dynamic marking of mf. The second system is for Dm9 and G7. Each system includes a standard musical staff and a guitar tablature (TAB) staff below it. The TAB staff shows fret numbers and techniques like bends and slurs.

この譜例3に関して言えば、9thがどうこう、と言うよりは、
「モロにギターのフレーズっぽいペンタの感覚」から離れるようなつもりで作りました。
(※一応9thも入れていますが)

この様に、ヨコに動く場合でも、これまで覚えたスケールポジションの
どの辺りを行ったり来たりしているのか？は把握しておきましょう。

さて、今回は9thだけでテキスト1回分が終わってしまいましたが、今現在の趣旨は、
『音楽的に高度寄りなプレイをする方法』でしたね。

その1つの方法として、「テンションを使う」という方法論を今は学んでいますが、
例えば、主にペンタのみで弾いた譜例1と比べると、譜例2と3の方は
幾分、大人っぽく感じるかと思えます。

ペンタトニックスケールは、ダイアトニックスケールに比べて音が2音少ないので、
よく言えば「シンプル」ですが、「複雑さや高度さ」からは少し遠ざかることが多いです。
(※ペンタのみでハーモニー的に高度にしていく方法もありますが)

この辺りのスケールやそれぞれの音の響きの違いを理解して、キチンとその時のプレイに
反映させていけるようになっていきましょう。

それでは次回に続きます。

ありがとうございました。

大沼